

詩編 106 : 1～5

ルカによる福音書 23 : 39～43

「イエスさまと一緒に樂園に」

【前奏】

【招詞】 詩編 29 : 2

【祈祷】

【聖書】 詩編 106 : 1～5、ルカによる福音書 23 : 39～43

【説教】 「イエスさまと一緒に樂園に」

<二人の犯罪人>

イエスさまの十字架の場面です。先週の 32 節では、イエスさまと一緒に二人の犯罪人が死刑にされることになり、一人はイエスさまの右に、一人は左に十字架につけられた、とありました。今日の御言葉は、十字架の上でなされた、この二人の犯罪人とイエスさまとのやり取りが語られています。

実は、マタイによる福音書とマルコによる福音書では、イエスさまと一緒に二人の強盗が十字架につけられた、という事実を記しているだけで、ルカによる福音書だけが、イエスさまとこの二人の犯罪人が交わした会話を伝えています。一人はイエスさまをののしり、一人はイエスさまに救いを願いました。今日はこの場面の御言葉に、耳を傾けたいと思います。

<ののした一人>

さて、39 節にはこうありました。「十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののした。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。』」

先週の聖書箇所では、ユダヤ人の民衆と最高法院の議員たちが、イエスさまに向かってあざ笑い、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」と言ったこと。そして、ローマの兵士たちも「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と侮辱したことが語られていました。

そして犯罪人の一人もまた、十字架の上で、自分と同じ十字架につけられたイエスさまをののしたのです。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

この一人目の犯罪人は、自分と同じように惨めな十字架に架けられている上に、さらに人々にあざけられ、辱められ、どこまでも貶められているイエスさまを見て、もしかすると、この人よりまだ自分はマシだ。この人ほど愚かで惨めではない。そのように、イエスさまに対して、かすかな優越感を覚えたかも知れません。それでイエスさまを見下し、ののした。

あるいは、耐え難い痛みと苦しみの中で、イエスさまを、どうしようもない怒りや、不満や、死にゆく恐怖の捌け口にしたのかも知れません。

どちらにせよ、彼は、イエスさまがメシアかも知れない、などということは思ったことさえないでしょう。しかし今、罪を犯した自分と一緒に、「ユダヤ人の王」という罪状で、救い主を名乗ったと言って、十字架にかけられて殺されようとしている。あらゆる人にののしられ、自分も救えない、誰も救えない。それで何が救い主か。何がメシアか。

彼にとって、イエスさまのお姿はただただ愚かで滑稽に見えたのかも知れません。

<もう一人の犯罪人>

ところが、40 節にはこうあります。「すると、もう一人の方がたしなめた。『お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。』」

この二人目の犯罪人は、イエスさまをののしった一人目の犯罪人をたしなめた、とあるのです。彼は言いました。「お前は神を恐れないのか。」

この言葉から、このたしなめた方の犯罪人は、イエスさまに対して「神への恐れ」を抱いていることが分かります。イエスさまをののしることは、神さまをののしることであり、神をも恐れない行為だ、と言っているのです。

でも、この彼はなぜ、イエスさまに神への恐れを抱いたのでしょうか。

彼もまた、ののしった方の犯罪人と同様に、これまでイエスさまをメシアと期待していたわけでもなかったでしょうし、この十字架の上が初対面だったのではないかと思います。

しかし彼はおそらく、イエスさまが、自分と同じように十字架の苦しみを味わいながら、その中で祈られた御言葉を、聞いたのではないのでしょうか。

34 節には、イエスさまのこのような祈りの言葉が記されていました。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

彼は自分の隣で、共に十字架の苦しみにあるこの方が、天の神を、親しく「父よ」と呼ばれるのを聞きました。そして、ご自分のことをののしり、攻撃し、十字架につけた者たちのために、「彼らをお赦してください」と祈った言葉を聞きました。

彼はこのような祈りを、初めて聞いたのではなかったのでしょうか。

そしてそれは、大変な驚きであったに違いありません。

彼はこう言いました。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」彼は、もう一人の犯罪人と共に、自分は確かに罪を犯しており、今の苦しみはその当然の報いである、ということを実感しています。

でも、このイエスという方は無罪だ。何も悪いことはしていない。ユダヤ人の王。メシア。そんな理由で、ただ人々の声によって、十字架につけられ、殺されている。そして、黙ったままで侮辱され、傷つけられ、殺されながら、自分を十字架につけた者たちの罪の赦しを、神に祈っておられる。

…彼は、今まさに罪のない方が、それは神の御子でしかありえないお方が、すべての人の罪の赦しを祈りつつ、自分と一緒に犯罪人の一人のようにして十字架に付けられているのだ、と知ったのです。

彼はこうして、十字架の上で、まことの神の御子であり、まことの人となられた救い主、イエスさまと出会い、イエスさまが成し遂げようとしておられる、「救い」を見たのです。

イエスさまが実現なさるのは、ご自分が十字架から降りてくるのではなく、人々の罪の赦し、そして彼の罪の赦しでした。

<救いとは>

もう一人の、ののしった犯罪人は言っていました。「自分自身と我々を救ってみよ」。

しかし、「救い」とは何なのでしょう。奇跡の力で、今、十字架から降りることでしょうか。強い力で自分に敵対する者が一掃されることなのでしょう。自分の都合の良いように、願い通りに、事が運ぶことなのでしょう。そうではありません。

「救い」とは、神が共にいて下さることなのです。罪によって神さまに背き、神さまから遠く離れ、滅びへと向かっているわたしたちが、その罪を赦していただき、再び神さまの御許へ帰ってくる。神さまの恵みと祝福のもとへ帰ってきて、神さまと共にある喜びのうちに生きる者とされること。それが「救い」なのです。

たしなめた方の犯罪人は、苦しみと絶望の極みである十字架の上で、罪のない神の御子が、そのようにして今、誰よりも自分の最も近くに来られて、自分と共にいて下さることを知ったのです。

彼は自分が、神さまを恐れなければならない、神さまの御前に出ることが出来ない、罪人であることを思いました。

しかし今、神の御子はこんなにも近くにおられ、人の罪の赦しを、父なる神さまに祈って下さっている。この絶望と、苦しみと、悲惨の極みである十字架にあってもなお、その只中に自分と共にいて、自分のことも神さまに執り成して下さっている。

彼は、生きた神の御子イエスさまが、彼と出会い、彼と共にいて下さることによってこそ、悔い改めと、イエスさまを信じる思いが起こされたのです。

イエスさまが、十字架の刑に処せられるのでなければ、この犯罪人はイエスさまと出会うことは出来ませんでした。イエスさまは、神の御子でありながら、わたしたちを救うため、わたしたちと出会い、招いて下さるために、低く降って、わたしたちと同じ、まことの人となりました。そして更には、人から見捨てられ、神からも見捨てられ、もう救いようがない、そんな罪人とも同じになって下さいました。

イエスさまが見捨てる者は誰一人おらず、どんなに手遅れに思われる者でも、たとえ死ぬ直前であっても、どんなに望みがないようなところであっても、イエスさまはそこにも来て下さり、出会って下さり、共にいて下さるお方なのです。

<わたしを思い出して>

だからこそ、このイエスさまにこそ、彼は救いの希望を見出したのです。

それで、彼はこう願いました。42節「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」

ここで、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには」とあります。この翻訳ですと、御国という場所があって、そこにイエスさまが行かれるときに、わたしのことを覚えていて下さい、わたしも共に行かせて下さい、というように聞こえます。

しかし、ここは口語訳聖書では、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と訳されていました。

聖書で御国、神の国、というのは、どこか天国のような場所のことではなくて、神さまのご支配のことを意味しています。そうであるならば、ここの意味は、イエスさまが神さまのご支配を完成なさるために、神の権威、神の全権をもって来られる時には、わたしを思い出して下さい、ということです。

つまり、終わりの日。神さまの最後の裁きが行われる日。復活し、天に上げられたイエスさまが、神のご支配を完成させるために、再び来られる日のことです。

そのような終わりの日に、このわたしをどうか思い出し、あなたの恵みのご支配に入れて下さい。わたしを神と共に生きる者として、罪を赦し、救いに入れて下さい。あなたは、その権限、権威を持つお方ですから。彼はそう言っているのです。

「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。これはもはや、信仰の告白といえるでしょう。

<わたしと一緒に樂園に>

これに、イエスさまはお答えになりました。43節「するとイエスは、『はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる』と言われた。」

この「樂園」というのは、「園」つまり聖書においては「エデンの園」を表す言葉です。

エデンの園とは、神さまに創造され、命を与えられた人間が、神さまの祝福と恵みのもとで生きるところを意味します。

しかし、創世記3章の物語にあるように、人は神さまに背き、罪を犯し、樂園から追放されてしまったのです。そうして荒れ野で生きなければならなくなったのが、神さまから離れてしまった人間の罪の苦しみです。

しかし、その「樂園」に、イエスさまは「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒にいる」と言われたのです。

「楽園にいる」。それはつまり、追放されなければならなかった罪が赦され、神さまとの関係が回復させられ、神さまの祝福と恵みのもとで生きる者とされる、ということです。

その神の祝福と恵みのもとに、あなたは今日、わたしと一緒にいるのだ。イエスさまは、そのように約束して下さいました。

聖書の救いは、死んだら天国という場所に行くことではありません。神さまと共にいること。神さまの祝福と恵みのもとに居ること。これが、救いです。

この犯罪人にとって、十字架の上で、もはや地上の命もあとわずかという時。彼は生ける神の御子イエスさまと出会い、この方にこそ救いを求めるべきと知りました。

そして、やがて来る世の終わりの日に、わたしを思い出して下さいと願った。自分は救われる権利などないが、イエスさまなら、と一縷の望みを見出したのです。

そうしたら、いや、あなたは、今日、わたしと一緒にいる。今から後、わたしから一日たりとも離れることはない。今生きているこの時から、命が尽きて、地上の歩みを終えたとしても、あなたは今日、この日に、神の恵みのもとに、わたしと一緒にいるのだ。わたしはもう、あなたを捕らえて離さない。イエスさまは、そう宣言して下さいました。

わたしたちが地上の命を終え、死んでから、この世の終わりの日、神の国が完成して、復活と永遠の命が与えられるその日までの間。わたしたちは自分がどうなっているか、そしてすでに召された人たちは、今どうなっているか。それを具体的に知ることは出来ません。

しかし何にせよ、わたしたちはイエスさまに出会い、捕らえていただいたなら、もはやひと時も離れず、イエスさまと一緒にいられるのです。

いつ、どこで、何が、どうなるか。それが分からなくても、復活に与る終わりの日がいつであろうとも、とにかくイエスさまと一緒にいて下さる、ということは確かです。

生きている日々のあいだ、苦しみの時も、悲しみの時も、嘆きの時も、常に、最も近く、共に歩いて下さっているイエスさまが、召される日にも「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言って下さる。神の恵みと祝福のもとで、あなたはこれまでも、今も、これからも、主イエス・キリストと共にいると約束されている。

これこそ、わたしたちの慰めであり、希望であり、救いなのです。

この犯罪人は、人生の一番終わりの瞬間に、イエスさまと出会いました。そしてイエスさまと共にいて下さる恵みを知り、救いにあずかりました。

救われるのに、もう遅すぎるということはありません。また、犯した罪があまりに酷くて、救いようがない、もはや手遅れ、ということもありません。

わたしたちは、この十字架に付けられるような犯罪人よりは、自分はもうちょっとマシだと思っているのでしょうか。彼よりは救いに近いと考えているのでしょうか。そんなことはありません。神さまの裁きの前で、罪を犯していないと言える者などいません。

わたしたちもまた、イエスさまが来て下さり、イエスさまが罪を担って下さるのでなければ、神さまの裁きによって、絶望の中で、十字架の苦しみと死を受けるべき者だったのです。

しかし、そのようなわたしのために、イエスさまの十字架は、これまでも、今も、これからも、差し出されており、イエスさまは、これまでも、今も、これからも、わたしと共にいて下さるのです。

この犯罪人は、人生の最後の時にイエスさまと出会い、救いの恵みに与りました。

しかし、この恵みを受け取るのは、早いに越したことはありません。イエスさまと共にある祝福と恵みを味わう日、慰めと希望を知っている日は、人生で一日でも多い方が幸いです。

生きている時も、死ぬ時も、わたしがイエスさまのものであること。ずっとイエスさまと共にあること。そして、やがてイエスさまが御国を完成させて下さる時に、わたしたちもまた復活を与えられ、永遠に神さまと共にいる者とされること。この恵みを知っていることはとても幸いです。

わたしたちの罪の只中にも、絶望や悲惨の只中にも、イエスさまの十字架と復活によって与えられた、この唯一の希望が、確かに立てられています。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちにとって、絶望としか思えないようなところにあっても、イエスさまは最も近くに来て下さり、わたしたちと出会って下さいます。わたしたちのために、共に苦しみ、共に呻き、執り成し祈り、すべてを担い、罪の赦しを得させて下さいます。

そのような救い主なるイエスさまが、わたしたちと共にいて下さることこそ、救いです。

わたしたちにイエスさまを遣わして下さい、心から感謝いたします。

イエスさまの十字架と復活の御業によって、わたしたちを、わたしたちの隣人を、世のすべての人々を、あなたの楽園に招いて下さい。恵みと祝福の内に置かれて、あなたにあって生きる幸いを、造られたすべての者に覚えさせて下さい。

このお祈りをイエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 107 「主イエスのみ名は」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン